

新宗教のメディア実践とその宗教観

—初期ラジオ民間放送を中心に—

榎本 香織

1. 電子メディアと神秘的想像力

はじめに

20世紀後半にインターネットが新しい形態の電子メディアとして一般に普及し始めた前後、この新たなメディアを使用することによって生まれるであろう未知の世界について語った多くの著作が記された。そしてその中では、インターネット上のコミュニケーションの様相を、脱身体的で、ある種宗教的な文脈で捉えたものが少なからず登場した。

例えば乗越たかおの小説『アポクリファ』(1991)はかなり早い時期に登場したその種の作品の目立ったものであるし、精神科医の大平健が接した患者もまた、チャットを通した相手との「魂の付き合い」を克明に描写した¹。これらの後にも、映画『(ハル)』(1996)、テレビドラマ『With Love』(1998)等の作品の中で、インターネットやメールによって「密接で」「ほんとうの」「ピュアな」関係が構築されていく様子が取り上げられる。これらに共通して認められるのは、「電子メディアを介して日常や身体性からの解放が強調され、そこには精神的側面のみで人と人が繋がることができる」という神秘性を伴う想像力である。このような想像力によって、人と人とを結ぶメディア空間のイメージは構築され、今日においてもそのイメージは断片的ながらも生きている²。そしてこの感覚は、特に心の問題や宗教的な問題を取り扱う現代的言説において重要な意味を持つものとして、こんにちの宗教とメディア利用の関連性の背後に潜んでいるといえることができるだろう³。

電子メディアと神秘的想像力・その歴史的連続性

しかしこのような神秘的な想像力は、インターネットの登場において鮮烈に明示されたものの、必ずしもこれによって初めて登場した「固有」のものではないことに注意しなければならない。インターネットが登場する遙か以前、過去に「新しい電子メディア」としてラジオが登場した時においても類似の言説は既に登場していたのである。情報化、テクノロジー化が加速的に進む現在において、ようやく「サイバースペースやグローバリゼーションなど未来志向の研究が活発化するときだからこそ、未来に開かれた歴史のまなざしを奪還していく作業が、一層重要である⁴」との指摘が、主にメディア論の文脈からなされ始めているが、メディアと宗教をめぐる言説においても同様のことが当てはまる。この二つの関連性について、歴史的に俯瞰する作業も必要なのではないだろうか。

例えば「電子メディア」の前身としてラジオが挙げられる。日本にラジオが登場したのは1925年であるが、科学が宗教的な想像力と融合したようなラジオに対する言説は、「ラヂオ気分」とい

う当時の気風の一部を占め、そこにはラジオが人類を未知の世界へと繋ぐだろうという、神秘的な期待が込められていた。この「ラヂオ気分」は、年月と共に進んだラジオの大衆化の過程において希薄となるものの、必ずしも完全に消滅したわけではなかった。後に1950年に放送法が成立し、民間放送が開始されると、幾つかの教団がラジオ放送に向けての活動を展開する。そしてその実践の背景を眺めると、ラジオという新メディアに対して、それぞれの教団ならではの独自の宗教観を垣間見ることができる。中にはその活動や実践形態が、教団の宗教観を反映したものであるとも言える程に顕著に現れることもある。

次項からは、まず1925年から50年までの日本におけるラジオに関する二つの側面について俯瞰したい。一つは「放送」というものに対する政府の姿勢、もう一つはそれとは一線を引いて大衆の間に広まった「ラジオ気分」という当時のラジオを巡る気風についてである。前者においては、1950年以前の日本のラジオ利用がいかんにして統制されたかを示す一方で、ラジオという新しい電子メディア誕生当時に大衆に広まった心的状況に触れていく。

次に民間放送が開始され、より自由な放送のあり方が実現した1950年代当時の金光教と生長の家におけるラジオ放送の実践の背景を取り上げたい。今回この二教団に焦点を当てたのは、金光教が新宗教の中でもかなり早い時期にラジオ放送を開始したこと、そして生長の家は「文書伝道」に代表されるその活発なメディア利用に着目したことによるが、これは二者間のラジオ利用の羅列のみを目的とするものではない。本稿では、民放開始直後に同時期にラジオ放送に参入したそれぞれの教団におけるラジオ実践と、それを支えた思想的背景の重層性を俯瞰する。各教団の放送事業への姿勢を示す資料を中心に振り返り、ラジオ放送の背景に存在する各宗教の宗教的関心の多元的な様相を考察することが本稿の目的である⁵。

2. 国家のラジオ統制と大衆のラジオ受容(1925-1950)

ラジオ放送の誕生

日本におけるラジオ放送の誕生は、1925年3月22日とされている。もちろんこの年以前においても、ラジオはアマチュア無線愛好家達によって個人単位で楽しまれ、実験配信として衆議院議員選挙の開票速報の放送も行われていたりもした。比較的穏やかな進歩の過程を辿っていたラジオであるが、関東大震災をきっかけに、社会不安状況下での正確な情報伝達手段として求められるようになり、このことが契機となってラジオ放送に注がれる期待は次第に高まることになる。

この時通信省が想定していたのは、マス・コントロール手段としてのラジオであった。山口誠によると、当時のラジオ構想は政府が放送形式から放送内容までの一切を管理できる性質のものであり、「放送用私設無線電話規則」という省令によって実現するようになったという。この省令は「ラジオ放送の送り手にも受け手にも通信大臣の許可取得を義務づけるもので、それまで「実験放送」という方便によって実質的に野放し状態だったラジオ放送を積極的に管理し、政府が許可したラジオ放送だけを存続させ、その他のラジオ放送のあり方は禁止することを明確に宣言するものだった⁶」。

放送局は当初東京・大阪・名古屋の三ヶ所に公益社団法人として設置されたが、これらは

それぞれ独立しており、番組内容も独自に企画・放送されていた。しかしすぐさま、政府の放送事業の国家統制意識により、一元的管理が容易な公共事業として確立させるために三局は統合され、1926年には社団法人日本放送協会(NHK)が設立された。

放送法成立～民間放送参入に至る経緯―戦時下～戦後のラジオ変遷から―

日中戦争や太平洋戦争によって、日本におけるラジオの役割は大きく飛躍した。とはいえ、その役割はプロパガンダとしてのものであった。事実上政府のコントロール下にあったラジオ放送は、「父や兄、そして夫がいる戦場の状況を聞くために、あるいは閣僚や高級将校のラジオ講演から戦況を知るために、あるいは軍歌マーチを聞いて自らを奮い立たせる⁷」ことにより、戦争を遂行するために不可欠な総動員体制を打ち立てることに貢献した。

また、この時期はラジオの進化が最も著しい時期でもあったことは注目すべきである。人々がラジオの元に来る機会が増えるということは、同時にその需要の増加をも意味し、1937年3月時点で約21%に過ぎなかったラジオ普及率は、1941年の太平洋戦争時ではすでに約45%にまで急上昇した⁸。こうした普及率の背景には、ラジオ自身の性能的向上も関係している。ラジオの需要が伸びて市場が拡大すると、安価で良質なラジオが量産可能となり、個人的に聴くスタイルのラジオから、大勢がスピーカーの前に集まって聴くスタイルと変化し、より人々に身近なものとなっていった。いずれにせよラジオの質的向上や飛躍的な普及の背景は、戦争という危機的状況と密接に結びついていたと言える。

そして戦後になると、戦時下での一連の放送の反省から、1945年9月に言論および新聞の自由に関する指令がGHQより下され、これにより新聞・放送その他の出版物などによる不真実、または公安を害するおそれのあるニュース報道は一切禁止される。またGHQはNHKに対し、ラジオ放送に関する根本的な再編成を要求し、逋信院にその覚書を提出している⁹。

そして一事業者による電波の独占を排除すべきであるという気運が高まり、1950年には放送法¹⁰が成立した。これにより事実上、民間企業によるラジオ放送の出現する素地がここで作られることとなり、より自由な民間放送が誕生することになる。

大衆のラジオ受容―「ラヂオ気分」を中心に―

以上のように、ラジオは戦後まで国家によってその利用を統制されていたが、一方大衆はラジオという装置をどのように受け止めていたのだろうか。その点を説明するために、ラジオ黎明期に人々の間で広まった、ラジオに対して抱かれた一種の脱身体的・神秘的な感覚に触れておきたいと思う。日本より一足早くラジオ及び無線が発達したアメリカでは、それらは十分神秘的で、そのイメージは中世以来のロマン主義やキリスト教的思想のなかで育まれた神秘的・宗教的思想の中から生まれたという¹¹。そしてこの神秘的な思想を支えたのは「エーテル」の概念であった。

当時電磁波理論を説明するために自然科学の分野においても流用されたエーテルは、それ自体がそもそも宗教思想と深い関わりがあり、電磁波という不可視の対象を具象化し、肉体を離れて聞こえる声を「神の声」と捉えるに適した概念であった。そしてこのような感覚は、日本でも「ラヂオ気分」という当時広まった気風の中にその片鱗を垣間見ることができる。「ラヂオ気分」

とは、「ラジオというこれまでに見たことも聞いたこともない新文明の出現に、人々がいだいた心的状態の相対的な表現」であり、「驚き、好奇、期待、不安、危惧、喜び……等々、さまざまに入り組んだ興味や関心をもってこれを迎えた」ものであった¹²。

その心理的特徴の一つとして、竹内昭子は作家の久米正雄の記事を紹介している¹³。久米は大正14年の『女性』5月号においてラジオを聞いた感想を以下のように述べる。

何だか宇宙を圧搾して吾物にしたような気分は、とても堪らないだろうと思う。何にもせよ、霽れ渡った宵の空の、夕螢に光っている蒼深い中に、繊く微妙な撓みを持って、張られている空中線を仰ぎ、それを通じて目に見えぬ電波が、無限に拡がり伝わって来るのを思うと、全く、神秘的な気持ちがある。その不思議さだけでも、少し物心ついた少年時に星斗欄たる空を仰いで、宇宙の神秘に驚いた時の心を、蘇らしてくれる。¹⁴

また室伏高信も同誌10月号において、ラジオ文明は反肉体主義的価値体系の絶頂に達したものであるとし、ラジオ文明というものがいかに身体感覚を置き去りにした、精神至上主義的なものであるかを批判している¹⁵。「ラヂオ気分」とは、当時の人々にとってラジオが神秘的なものであり、それによって身体感覚が新しく革新される状況が創出されていく状況を捉えた表現であると言えるだろう。

時の経過と共にラジオの放送網や番組構成が整備され、またラジオの仕掛よりもそれが発信するコンテンツを消費することに大衆の関心が向くようになることにより、こうした言説はやがて薄らいでいくことになるが、それは「ラヂオ気分」の風潮の消滅を意味するのではなく、消費の背景に押しやられていったというほうが正確であろう。

3. 民間放送としての宗教放送開始とその背景

3.1 金光教のラジオ放送

金光教のラジオ放送について

金光教が教団として民間放送番組に参入したのは、1951年11月、朝日放送の要請を受けて「金光教の時間」という番組を放送することになったのが始まりである。これは大衆の精神文化向上に貢献するために、朝日放送が複数の宗教団体に放送時間を提供したもので、他に天理教や東西本願寺、キリスト教なども含まれている。金光教はラジオによる布教を「電波布教」と命名し、その趣意を1951年12月号の『金光教報』において以下のように説明している。

本教の電波布教は従来 NHK から教派内の個人を対象に講師の交渉があつて、講師がそれぞれ個人の立場で放送をしていたが、今回朝日放送から教派に対して放送の依頼があり、しかも連続して毎週行うようになったことは、画期的な意義を持つもので、本教としては朝日放送の方々にこたえ、電波を通じて一般社会大衆におかつて教化のお役に立たせて頂くことになった。

もとよりこれは、電波を通じての生神金光大神御取次のお働きと信じ、その御用に当たらせて頂くのであるが、単に一教派の立場からだけするのではなく、広い高い立場から一般

の人々が宗教心に目覚め確固たる信仰に根ざした生活を打ち立てていくことを念願とするものである。

(『金光教報』1951年12月1日)

このような趣意のもとに放送番組を設けたのが、金光教における初めての教派番組である。しかしこうした表明をしたものの、ラジオ放送に対しては非常に冷静な態度を取っており、翌1952年に設置された「電波布教協議会」では、ラジオ放送は信仰の機縁は与えることはあっても他の方法より期待は薄いことを早々に実感していた。

金光教の主要な機関誌内で、初めてラジオに関する記事が登場したのは1925年4月、岡山にある大教会が火災にて焼失したことを東京地方のラジオ局が放送したという記事においてであった。その記事も「東京地方は午前十一半國民新聞の放送により今回の災禍を一般に報ぜられたと。(『金光教徒』1925年4月24日号)」の一文のみで、この頃ちょうど世間に浸透していた、いわゆる「ラヂオ気分」的な特色は見あたらない¹⁶。また、翌年の4月にも「ラジオ」という用語が紙面に登場するが、どちらかというとな否定的な意味合いで使用されていた¹⁷。教団内において、ラジオは伝達手段の一つであるという認識がこの頃から既に浸透しており、きわめて実用的な装置としてラジオを捉えていたといえる。

ラジオ放送の内容とその背景

しかしラジオを通じて布教するという行為は「生神金光大神取次の働きそのものあると考えたい」とし、「一度マイクの前に立つ以上は、その前で生神金光大神の御働きを実現させて頂くものと信念させていただかねばならぬ」と述べるあたりに、ラジオ放送の意義を宗教的に説明しようと試みている側面も認められる¹⁸。そして電波布教の誕生は、当時議論に挙げられていた「御取次」のあり方についての問題と絡んでいく。

つまり、金光教における「神から金光大神に委ねられた願いに沿い、人の願いを神に、神の思いを人に伝えて、神と人が共に助かっていく世界を顕現する」という「取次」の働きは、本来特定の座(结界)においてのみ行われるものであった。しかしこの頃より「御取次」解釈の広義化が生じつつあり、その変化の中で電波布教も、広義化されつつある取次解釈の延長線上における問題として「教務御用も取次の作用そのものである、という解釈の元で扱われなければならない」とされたのである¹⁹。

協議会側はこのようにラジオ布教に「御取次」という宗教的意味付けを行い、そうした意識でラジオ布教を捉えて放送に望んだのだが、そのような宗教的解釈が信者側にも浸透したかは定かではない。対内的機関誌『金光教徒』のラジオへの投書を見る限り、信者側は一般大衆的なラジオ受容、つまり音楽や娯楽番組やニュースを聞く、もしくは教会内での教師の説教を単純にラジオを通して間接的に聞くという形で「金光教の時間」を聴取していたようである。

また協議会側からすれば、初の教派ラジオ番組ということで教外者も聴取する可能性を想定して番組を構成しなければならず、その点を苦心しなければならなかった。放送開始から一年近く経った1952年9月の『金光教報』には、「ラジオによる宗教放送は、信仰の機縁は与えることはあつても、他の方法に較べ余り効果は期待できぬ」という感触を得ているものの、本教が対

外布教への力が微弱である以上、電波布教に対しては「今までにない領域に迄進んでいると思う」としてラジオの存在意義とそこでの放送行為の意義自体は認めている。そのため宗教放送が入信手引きの働きをするということに対して過剰な期待はできないながらも、「電波の公共性・大衆の精神生活向上」という、そもそも朝日放送が放送依頼を教団に行った際の放送主旨を受け入れ、一般聴取者を考慮した放送内容を充実させていかねばならないとの観点から番組を編成していくことになった。

よって番組内容も悪く言えば当たり障りのないものとなり、信者側からすると「少々物足りない」性質の放送番組が続くことになる。そのことから1953年頃より、ラジオ放送に対する信者の批判的な投書が目立つようになり、1956後半から57年前半にかけて、『金光教徒』の投書欄内においてラジオ放送をめぐる論争が繰り広げられた。そこには、放送内容に不満を持つ信者と、公共性が高く、社会教化に立脚した内容を重視することにより、宣伝やおかげ話などをなるべく避けようとした協議会側との放送に対する姿勢の食い違いが見て取れる。

本教のラジオ放送を聴かせてもらうと、今日迄の放送は皆精神訓話的、道徳生活的なものばかりで、しかも金光教祖の御教えはほんの申訳程度にしか伝えられておらぬ。又情熱と熱化の白熱的信仰を表現していないのは相すまなく思います。今後は金光教の教えこそ世界無二の教えである事を力説し、聴衆者をして直ちに御道の信仰に入らしむ如き放送をしてもらいたい。

(「ラジオ放送について」9月21日)

放送者に対して本部教庁が「宣伝的意図を盛るな」と指令しているそうだが、それはチンドン屋の宣伝を禁じていると良心的に考えたい。そのことばにおじているのか、一世代昔のような道徳訓話的放送をやっているのが現在ではないか。「金光大神の御取次を頂けば、あらゆる難儀が助かる」と力強いえる放送でなければならぬ。教祖は「おかげのふり売りをするな」といわれたそうだが、「布教活動」はさしとめられなかった。宣伝という語感からくる感じにこだわるとするならば、それは「ラジオ布教」といってよい。「おかげのふり売り」の真意を会し、放送協議会も、放送原稿の審査会みたいなものにならずに、そういうことの研究をするのが大切な仕事ではないのか。

(「ラジオ放送について一言を呈す」10月31日)

信者のこのような投書に対し、放送協議会は11月1日号にて以下のように弁明を行う。

朝日放送は、1952年11月11日に放送を開始するとすぐ、民間放送の公共性を重視し、精神文化の向上に奉仕する意図のもとに、朝の十分間を宗教団体に提供されることになり、本教は要請により同年11月14日から「宗教の時間」の放送に参加して今日に続いているのであります。従って放送内容は、社会教化という線に立脚して、本教の宣伝だけに陥ることのないようにしております。

そのため放送協議会は、本教の露骨な宣伝に走らず本教の信心生活を真剣に社会に呼びかけて、一般人の宗教心を呼び覚ますことに努めるよう、共同推敲をしているわけがあります。

(中略)その主旨について御了解いただきたいと存じます。

(「朝日(ABC)放送について」11月1日)

これは先にも挙げた1951年12月の『金光教報』に掲載された電波布教にあたっての記事に基づいた弁明であるが、それでもやはりラジオの放送に対する姿勢に対する意見は続く。

……一応その言われることは分かりますが、お道のため次の点特に要望せずにはおられません。

(一)放送者の人選を慎重に

どうやら新人ばってきという方針らしく、やたらに新しい人が登場されますが、どうも軽くて他教派の人に、これが金光教の放送だと大言できかねるようなのが多くて、さびしい感を禁じ得ません。(中略)

(二)本教的色彩を強く出すことが、恰も宣伝の具に供するのかの如く曲解されているらしいですが、之は大きな誤りです。

教義、教典の内容をはっきりと打出し、教祖のことははっきりと内容に盛ったからとて、それがそのまま宣伝になるものではありません。仮にそれによりお道に入信する人が次々に出たからとて、何でそれが悪いのでしょうか。そういう事を言うのなら、映画も、幻灯も、その他の一切の文化布教はしてはならぬことになり、特別放送などもっての外ということになります。

現に他宗派の内容が赤裸々に教義を打ち出していて、少しも厭な感じはないではないですか。放送者自信の心中に宣伝の野卑なきものささなければ、いくら強く本教的なものを打出してもなんら差し支えありません。

(「放送内容の充実、近畿放送協議会に提す」11月11日)

実際、ラジオ放送を開始するにあたって、教団の電波布教協議会はラジオ放送が開始された翌々年の1952年より電波布教協議会を設置して、ラジオ放送がどのような特異性を持ち、布教面からみたラジオ放送の意義や目的、放送内容の在り方、その方法や形式についてはどのようにするべきかなどが詳細に議論されていた。逆に言えば、それだけラジオ放送が従来の幻灯や映画などのメディアと異なり、さらに公共性の強い影響力のあるメディアであり、放送の在り方に対してより慎重な態度を取らねばならないことを自覚していたのである。

ラジオ放送に対する一連の論争は、結果的に翌年の6月頃に終息を迎えるが、それは『金光教徒』に掲載されたラジオ放送の要約がそのきっかけの一部を担っている。それは、死期の迫った青年が、正しい信心によって不治の病を克服するという、いわゆる「病氣治し」の体験談であった。こうした説法から体験談への放送内容の変化は、内容的にも直接的で非常に分かりやすくて得ており、宗教放送の在り方として新しく求められる一つの方向性を示す物として、一応信者の理解を得ることとなった²⁰。

金光教においてラジオとは、あくまで布教をするための道具であり、大衆的ラジオ消費の中へ

と早々にラジオの実践を移すことが最良の方法であると捉えていたと言えるだろう。しかしラジオでの布教それ自体を「御取次」の一形態として位置づけられる必要性を感じさせるような、一種の宗教的な性質をも内在していたものとして捉えられていた²¹ことは、メディアによる新しい宗教性の創出の可能性を考える上では留意しておく必要があるかも知れない。とはいえ、金光教が第一に考えたのは、ラジオ放送内容の充実化と、それらを通じた人々の精神生活の向上や心の救済であったと言える。

3.2 生長の家のラジオ放送 国際宗教放送

「文書伝道」で有名な生長の家が初めてラジオ放送を行ったのは、1952年10月、ラジオ東京の「希望の泉」においてである。しかし生長の家は教主谷口雅春が中心となって、宗教放送専門放送局である「国際宗教放送」の設立という更なる一大プロジェクトを、経済界の谷田国次郎等と共に企画しており、これが民放開始直後における生長の家のラジオ活動の中で一際特徴的なものと言えるだろう。

国際宗教放送は、日本宗教連盟を母胎とし、人々に精神的支柱を与えようとする意図で立案され、宗教的解説をつけたニュース、宗教音楽、宗教文学などを中心とした一教一派に偏らない宗教番組を編成し、放送することを目指すものであった²²。既に関東ではラジオ東京・文化放送の二局が開局していたが、周波数の再編成により新たにもう一つの周波数が民間に提供されることになり、中央放送、ラジオ経済、東京放送の三社が免許を申請し、1952年12月に既に短波放送の免許を申請していた国際宗教放送も、翌53年2月に申請した。1953年5月26日付の毎日新聞の記事において、国際宗教放送は放送局開設の抱負を次のように掲げる。

全国すべての宗教団体を含む日本宗教連盟が母胎となっており、日本人に精神的支柱を与えようという意図で行う教養放送である。(中略)一教一派にかたよらない公平な番組を作るため、会社と宗教連盟から選ばれた同数ずつの編成委員がこれに当り放送内容は当然宗教的教養とレクリエーションを主とする。例えば宗教的解説をつけたニュース、宗教音楽、宗教文学などがあり、クリスチャン・サイエンス・モニターに似た行き方だ。また短波の申請もしており、在外邦人向け放送と外国語放送によって世界宗教連合をつくるまでに発展させようと夢見ている。

『クリスチャン・サイエンス・モニター(CSM)』はクリスチャン・サイエンスの創始者であるメアリー・ベイカー・エディによって、当時のアメリカの扇情的ジャーナリズムに対抗し「何人をも傷つけない」「リビング・ルームで家族みんなが読める新聞」をスローガンに掲げて1908年に創刊された。国際宗教放送がこのCSMに類似した性格をもつことを目指していたということがこの紙面から確認できる。クリスチャン・サイエンスは谷口が最も影響を受けたニューソートと関連が深い思想の一つであり、この頃までにも谷口はニューソート関連の翻訳を積極的に行っている²³。CSMは宗教紙ではなく、教義を宣伝するものでもない。どちらかというと生活密着型の問題を好んで取り上げ、超宗派的な立場で「心の成長」を基軸とした記事を構成する高級時事評論誌的な

性格を持つものである²⁴。紙面には明示されてはいないものの、国際宗教放送の運営にクリスチャン・サイエンスの報道指針を手本とする姿勢が伺えるあたりに、谷口の宗教的な目的でのラジオ放送参入への積極的な関わりを見て取ることができる。

1953年に入ると、ラジオ機器頒布に関する広告が『生長の家』誌の巻末に3度ほど掲載されるが、掲載された3月・8月・11月号は、それぞれ全国紙上(毎日新聞)でも国際宗教放送に関する数少ない記事が掲載された時期とほぼ一致する²⁵。

また、『生長の家』9月号には「龍宮寶藏会」という経済会が発足されたことが紹介される。同会は公益目的のための経済機関で、会員には特約店利用による割引が得られるという生活協同組合的な特典等を与えるものであった。国際宗教放送の代表人でもある谷田国次郎が主な発起人であり、また寶藏会会則の第二章「目的」に「本会は共同精神を具現すること、経済循環の法則である「出せば出すほど殖える」と云う無限供給の精神原理をそのまま経済行動に実践し、人類光明化運動を遺憾なく展開せんことを目的」とするが(第4条)、その目的を具現化するための実践として「国際宗教放送の建設に協力し、国内及び世界の宗教が相互に理解協力して活動し、人類平和の根本的な解決貢献せんとする」(第5条)ことが第一命題に掲げられている。この「龍宮寶藏会」は、その設立時期を考えると、会員達にも実利的な側面も多少はあったものの、その実は国際宗教放送の施設運営費確保のための醸金機関としての役割が主であったと言える。しかしながら、こうした努力にもかかわらず、この電波獲得競争は、最終的に中央放送とラジオ経済が合併して設立された「日本放送(現:ニッポン放送)」に免許が下りることになり、結果として国際宗教放送の企画は未完に終わった。

とはいえ谷口もラジオ放送から即座に手を引いたわけではなく、これとは別に以前より申請していた短波放送の「日本短波放送局(現:ラジオ NIKKEI)」設立へと運動の方向性を変更し、これを1954年に実現させる。この放送局は「経済、市況、教育、宗教などを中心に放送しようというねらい」のもと、「戦後の荒れ果てた国民の“こころ”を豊かにする」ことを目的に設立され、この中で生長の家は1959年11月より「幸福への出発」というラジオ番組を開始し、今日に至る²⁶。当初のCSM的な放送局設立という大きな構想からは大きく懸け離れた感否めないが、それでも自らの放送局を設立させるという願望を、一応は実現させたと言えるだろう²⁷。

ラジオと「神想観」との親和性

この時期、すなわち1952-53年頃の谷口のラジオに対する熱意は、主に機関誌『生長の家』の中において顕著に認めることができる。特に放送局の認可を巡る競争の展開された1952-53年にかけての谷口の『生長の家』誌では、新聞に国際宗教放送の記事が掲載される前後にラジオ機器の広告を掲載したり、日々の法語においてもラジオと自ら編み出した行法である「神想観」との類似性を連日のように説いている。以下の記事はそのごく一部である。

「脳髓の考へ」が、「内部神性」なる「本当の自分」への考へに一致した「心の思ひ」となつてあらはれて来るやうにするためには、私たちの脳髓の考へを、神にまで波長を合はすやうにつとめねばなりません。即ち、心をしづかにして神の御心を脳髓に感じ、その啓示を受けてそのまま素直に実行しようと云ふ決意を起さなければなりません。これが即ち脳髓ラジオが内部神性(本当の自分)に波長を合はせる道なのです。

(「脳髓ラジオを「神性」の放送に波長を合はせませう」1952年7月5日)

「人間の心は、常に脳髓組織と云ふラジオ設備をもつて、自分自身の想念感情を周囲に対して放送しつつあるものである。その想念感情の強度に応じて、それは遠隔の地に達するものもあれば、近距離にしか達しないものもある。併しいづれにせよ、吾々は数億の人々から放送されつつある思想感情の波によつて取り巻かれているのである。

(「人間の脳髓は一種のラジオ・セット」1953年7月20日)

ニューソートやクリスチャン・サイエンス等の西洋の精神科学に深く影響を受け、メタフィジカル・ヒーリングを重視してきた谷口にとって、「エーテル」や「波動」は他者へ力を伝える媒体(メディア)であるし、ラジオはそうした思想のメタファー、もしくはイメージを具象化した装置そのものであったと言える。特にラジオの電波送受信のシステムは、人が高次の存在との合一を果たすための行法である「神想観」の過程とそのまま重複するものであった。

神想観とは精神統一によって自らの靈性を高次の次元へと引き上げることにより、神との合一を達成するという谷口の発案した行法で、1930年の『生長の家』第一輯第四号に初めてその用語が登場した。そこでは「神想観」を以下のように説明している。

吾々「生長の家」では就寝前に合掌正座して「神想観」の十分間修行をするのであります。即ちこの合掌を靈交のアンテナとして生きとし生ける物を活かし給へる無限智、無限光明、無限生命と一体となると観じ、(中略)生かされていることの深い深い信頼と平和と有りがたさで心を充たしてから眠りに入るのであります。(点は筆者による。以下同。)²⁸

この神想観の観念は、谷口にとって「自然科学的」「神道的」「仏教的」「基督教的」²⁹なもので、谷口の方教一致の思想を可能たらしめる根拠となる観念であるといえる。そして「これまでの坐禅や鎮魂や祈りと違って、全ての人に神人合一の世界を招来する³⁰」ものである。つまり神想観は正しい手順を踏めば、誰でもその境地に至ることができるという、ある意味システムティックな側面を持つ行法であった。

以降、谷口はしばしば神想観を「靈交のアンテナ」と比喻しており³¹、また、『生命の実相』においても著述しているように、先に登場した「エーテル」にも高い関心をしめしており、非存在の靈妙なエーテルが生命磁気や波動などの形として人間の身体にも影響を与えると考えていた³²。『生命の実相 第一巻』に「生長の家では必ずしも耳に聞こえなくともエーテル波動(ラジオ等)でも思念波動でもすべて波動を指して、コトバというのであります」とあるように、谷口にとってエーテルとラジオの電波(波動)は、「コトバ(言霊)」を生成するための同質の存在として捉えられていたのである。「神想観」という言葉が最初に登場したのは1930年6月に発行された『生長の家』誌の中においてであるが、世間に「ラジオ気分」が蔓延していた時期からわずか五年程しか経っておらず、おそらくは先の久米が述べたような靈妙なラジオ体験と同様の体験から少なからずヒントを得ていたと推測できる。そして谷口の場合は、以前より多大な影響を受けていたニューソートや大本、その幹部である浅野和三郎を通じて知った欧米の心靈主義などが、その

体験をより宗教的なものとして捉え支える一助を担ったと言える。

言霊や波動を伝道力の根源的力と捉え、その実践により成功をもたらした「文書伝道」が、布教活動であると同時に宗教実践そのものでもある生長の家において、ラジオは後の全体的な活動から見ればその一部に過ぎなかった感は否めない。しかしながら当時の谷口にとってラジオという文明の利器は、科学と宗教との融合を果たしたことを示すシンボリックなメディアでもあった。谷口の宗教観にしばしば見受けられるように、その行法や思想は科学主義的色彩を帯びており、正しい手順を踏めば誰もが実現可能であるという側面を持つが、ラジオが「電波を通じて声を運ぶ装置」であるということは、谷口の宗教観の中においては「エーテルを通じて言霊を運ぶ装置」とも換言可能でもあったといえる。人と波動の関係を説明する際に「ラジオ」と電波との例えを多用するが、それが谷口においてメタファーに過ぎないのか実証性あるものとして捉えていたのか、その区別が明確ではない部分が多い。しかし、波動を動物磁気等の観念とも連結させようとしていることが複数の著書の中でしばしば認められることから、単なる喩え話に過ぎないと容易に結論付けることも出来ないのも事実である。つまりここでも言霊をラジオという装置に乗せて伝播させることにより、より即時的でリアリティのある精神共同体を形成するという構想を、谷口は実存的な文脈においても描いていたのではないかと推測されるのである。

4. 宗教におけるメディア利用とその意味(まとめにかえて)

以上、金光教と生長の家の1950年代直後におけるラジオ放送における諸活動と、その宗教的思想背景を俯瞰したが、全体的に金光教はラジオを大衆的消費、つまりラジオというメディアそのものよりも、その中で番組を構成し、また消費してもらうという文脈において捉え、生長の家はより西洋的な、科学と宗教の融合したメタフィジカルな文脈で捉えていたと言える。金光教の場合、ラジオを通じて金光教を対外的に宣伝すると同時に、いかにして人々を感化し、心の救済を与えるコンテンツを構成するかにか点を置き、ラジオというメディアはそのためのメッセージの伝達手段という位置にあった一方で、生長の家の場合においては、ラジオは伝道手段であると同時に、その構成システム自身が神想観のメタファーでもあり、電波に言葉を乗せて発信することは、言霊を直接遠隔地にいる他者へ送り届ける宗教行為でもあるため、言霊による精神的なコミュニティの形成を目指すという、神秘主義的な側面を認めることができる。

これらのメディア利用の教団による差異は、それぞれの宗教観とは別にいくつかの視点によっても説明が可能であろう。例えば金光教はその基軸を辿ると19世紀にまで溯る教団であるが、生長の家は1930年に立教されており、その成長過程においてかなりの年月の差が認められる。これは森岡清美の教団ライフサイクル論に従えば金光教はライフサイクルの中でも「制度的段階」に位置し、組織化・制度化の過程が進み社会適応化され、落ち着いた特色を持っているのに対し、生長の家のライフサイクルはそれより以前の段階にあり、よりダイナミックな活動展開が可能であったと捉えることができる。また、当時の教団構造を見てもこの二つの教団はかなり性格を異にする。教祖の位置に関しても、金光教と生長の家では様相が異なる。金光教はこの時点でその活動を信者独自の自主性に任されている部分が多く、いわばボトムアップ型の教団なのに対し、生長の家はこの当時教祖である谷口雅春が積極的に教団を導き、出版物の

殆ど全ての執筆を行うほどの絶対的な地位におり、トップダウン型の教団であったといえる。しかし本稿では、各教団のメディア利用を、1950年の放送法成立以降の民間放送解禁という共通項を基軸として、それぞれの立場からラジオ放送をどのように展開させていったのか、その内実を見ていくことに重点を置いた。

これらは一見相反したベクトルを進んだように見えるが、それぞれの教団におけるメディア利用を通じた独自の宗教的行為であるという点においては変わらない。今後はさらに同時代における他の教団のラジオ利用についても、それぞれの宗教観がメディア利用へどのように反映されているかを、分析していく必要がある。

ラジオという新しい電子メディアが登場しようとした時、まずはじめに「エーテル」や「ラジオ気分」のような神秘性をめぐる想像力が創出された。オングの言説を援用すれば、ラジオは文字の文化のあとに再構築された「二次的な声の文化」の中に大衆を引き込むことに成功させたのである。この二次的な声の文化は、一時的なそれが保有している「そのなかに人々が参加(して一体化)する」という神秘性を持ち、共有的な感覚をはぐみ、現在の瞬間を重んずる共同体であり、マクルーハンの構想したところの、マイクロフォンによって拡張された神父の声によって包み込まれた「電気の教会」でもあると言えるだろう³⁴。しかしそうした期待はラジオの一般化、すなわち装置からコンテンツ消費へと大衆の興味の方向が移行すると共に希釈されて、単なる言語上のメタファーへと転化していった³⁵。

しかしながら電子メディアをめぐる想像力は大衆化の陰に追いやられたとはいえ、決して消滅するものではない。そのことは冒頭で述べたように、インターネットやその前身のパソコン通信が登場した際にもラジオ登場時と同様に、コンピュータを介し新たな超越性を期待する言説が生まれたことから窺い知ることができる。

電子メディアには、情報やサービス、娯楽といったコンテンツ・情報の提供という側面と、それらを通じて人間の諸感覚を革新する側面とがあり、金光教においては前者、生長の家においては後者の特徴が色濃く現れているが、その差異はそれぞれの教団が自らの教義の特色を活かしたコミュニティの形成を目指した結果であると言えよう。

現在、宗教的領域における電子メディア利用を考える際、さまざまな宗教集団がメディアをどう捉え利用しているのかを、より深く考察する必要があると考えられるが、そうした現代における宗教と電子メディアとの関連性の考察に歴史的な連続性や深みを持たせる意味においても、宗教とラジオをはじめとした「元・革新的電子メディア」についても更に歴史的な考察を深める必要があるのではないだろうか。

【参考文献・資料】

大平健『純愛時代』岩波新書、2000年

小田勝己『アメリカ新聞界の良識 クリスチャン・サイエンス・モニターの名記者たち』八潮出版社、1994年

久米正雄「空中法悦」『女性』5月号、1925年

竹内昭子『ラジオの時代 -ラジオは茶の間の主役だった-』世界思想社、2002年

- 谷口雅春『生命の実相 第一巻 実相編 上』日本教文社, 1956年
谷口雅春『生命の実相 第八巻 観行編』日本教文社, 1957年
谷口雅春『詳説 神想観』日本教文社, 1970年
西垣通『聖なるヴァーチャル・リアリティ 情報システム社会論』岩波書店, 1995年
乗越たかお『アポクリファ』河出書房, 1991年
浜日出夫「マクルーハンとグールド」『メディアと情報化の社会学(岩波講座現代社会学第22巻)』, 岩波書店, 1996年。
水越伸『メディアの生成 - アメリカ・ラジオの動態史 -』同文館出版, 1993年
水越伸編『20世紀のメディア 1 エレクトリック・メディアの近代』ジャストシステム, 1996年
室伏高信「肉体の美的機能」『女性』10月号, 1925年
森岡清美『新宗教運動の展開過程』創文社, 1989年
山口誠「ラジオ放送の出現と一九二〇年代の社会」『メディア史を学ぶ人のために』世界思想社, 2004年
山本透, 小田原敏, 伊藤正徳「草創期のラジオ気分 - 東京朝日新聞の記事から -」『上智大学コミュニケーション研究14』1984年
オング, ウォルター, 『声の文化と文字の文化』桜井直文, 糟谷啓介共訳, 藤原書店, 2002年(Ong, W.J. *Orality and Literary, The Technologizing of the Word* Methuen, 1982)
マーヴィン, キャロリン, 『古いメディアが新しかった時 - 19世紀末社会と電気テクノロジー -』新曜社, 2003年(Marvin, C. *When Old Technology Were New - Thinking About Electoric Communication in the Late Nineteenth Century* Oxford University Press, Inc, 1988)
『金光教徒』1925, 1926, 1952, 1956, 1957年
『金光教報』1925, 1926, 1951, 1952年
『生長の家』1952, 1953年
『生長の家五十年史』生長の家本部, 1980年
『テレビラジオ年鑑』テレビラジオ新聞社, 1954年
『毎日新聞』1953, 1954年

1 乗越と大平についての電子メディアにおける脱身体論的に関する説明は, 2003年度『東京大学宗教学年報XXI』における拙論「宗教サイトにおけるCMC空間の諸相について - 教団公式サイトと新霊性文化的個人サイトの比較より -」を参照。

2 もちろん, メディアと身体をめぐる問題はこの一言で解決できるほど容易なものではない。電子メディア上の特異な身体性については, 例えば西垣通『聖なるヴァーチャル・リアリティ』(1995)なども参照されたい。西垣はオンライン上の身体感覚を, カイヨワの「眩暈」になぞって喩え, 以下のように説明する。

ヴァーチャル・リアリティによる身体形成は他のメディアよりはるかに直接的で, その形成能力は桁はずれに強力なのだ。その原因は「没入感」と「対話性」にある。繰り返しになるが, ヴァーチャル・リアリティでは, みずからの身体内に生じつつあるズレを批判的に捉えることがきわめて難しいのである。だからこそ注意が肝心なのだ。(西垣, 76頁)

西垣にとっては、オンライン上の身体でさえ「聖性」という名の詐術によって形成されたもので、「自然で無垢」なものとはほど遠い存在であるという。上記の「魂」の繋がりを体験は、西垣にとってはそうした詐術にかかった人々の錯覚、シミュラークルの先行に過ぎないということになる。

しかしながら、メディア空間での体験に「錯覚」というカ学が働いていたとしても、メディアを通じて神秘的な感覚を人々が抱いた点、そしてそれが今日の電子メディアのみならず、歴史的な連続性をもつものであることは明示しておかなければならない。こうした感覚は現代に特化された問題ではなく、後述するラジオ登場時における人々の抱いた「ラヂオ気分」という言説においても既に萌芽していたためである。西垣の指摘はメディアと人間を巡る議論においては十分注目しなければならないが、これは独立した別テーマとして取り上げられなければならない問題である。本論においては、メディア空間においては、人は脱身体的で、精神性に純化されたような感覚を体験する可能性があるということを経験するに留めておきたい。

- 3 インターネットやメールなどを介して構築されたこのような関係を「スピリチュアルな関係」とし、その宗教的な側面を考察した近年の研究としては、伊藤雅之「ネット恋愛のスピリチュアリティ」(梶尾直樹編『スピリチュアリティを生きる』せりか書房、2002)などを挙げておきたい。

また、本稿の文脈とは少々異なるが、インターネットによる布教の可能性についての緻密な分析として、川端亮・兼子一「IT化された宗教実践—ある金光教教師の挑戦」(宗教社会学の会編『新世紀の宗教—「聖なるもの」の現代的諸相』創元社、2002)も挙げておきたい。

- 4 マーヴイン、471頁。(訳者である吉見俊哉のあとがき)。
 5 この間のラジオと宗教放送に関する先行研究として、放送開始から昭和10年代までのNHKで放送された宗教番組をまとめた石井研士の「ラジオと宗教放送」『國學院大學紀要 40』(2002)を紹介しておきたい。
 6 山口、155-156頁。
 7 同掲書、172頁。
 8 同掲書、173頁。
 9 『テレビラジオ年鑑』、12頁。
 10 同書は、放送法によって設定されたラジオ放送事業の形態について以下のように述べている。「(I)我が国の放送事業の形態としては全国あまねく放送が聴取できるよう放送設備を施設し、全国民の要望を満たし得る放送番組を放送する任務を負う国民的、公共的企業体(第七条)と一般に自由な事業として行うことができる放送企業体(民間放送局)(第八条)、との二つがあって、この二種類の企業体が、それぞれその長所を発揮して、相互に啓発することとなった。(15頁)」
 11 水越、74頁。
 12 山本、小田原、伊藤、80頁。
 13 竹内、40頁。
 14 久米、60頁。
 15 室伏、180-181頁。

室伏は、ラジオが登場し、人々がいわゆる「ラヂオ気分」に浸っているこの時期をラジオ文明と名付け、文明自体が反肉体主義的であることから、ラジオ文明はその絶頂に達した文明であると述べる。また「教会的宗教によって作り上げられた反肉体主義の価値体系は、皮肉にも科学の力によって現実の世界において実現されてきた、反肉体主義のために科学とそして教会的宗教とが共同戦線に立ってきたのである」と述べているが、教会的宗教とはすなわち西洋のキリスト教の事を指し、ラジオがそうしたキリスト教国の産物であることから肉体を疎外するものとして捉えられている。

- 16 同年のその後の紙面に「ラジオ」という用語が出てくる記事は、以下の通り。
 「花曇の十五日の朝、例の通りに登院すると放送局のラヂオで、岡山金光教本部が焼失したと聞いたがどうかと尋ねてくれた人があった(佐藤幹二「大教会所が焼けた!」大正14年4月24日号)」
 「本社の後炎上写真展観、同活動写真映写ならびにラヂオ受話公開は非常なる盛会を呈した。(中略)大阪放送局のラヂオ放送をラヂオラ、スーパーヘテロダインと称する六球式最優秀機に受けて、これを拡声機によりて公開した。二十五坪ほどの樓上も巧みに利用されてそれぞれほどよく排置(原文ママ)されたのでは、極めて落ち着きて参観又は聴衆することが出来、入場者は悉く満足の態であつた。(「本社の催し」大正14年6月19日号)」
 17 麴町教会長である長谷川雄次郎は、1926(大正15)年4月2日付の『金光教徒』で「腹の信心」とい

う記事において「信心の類はいろいろです。分けるならば、いろいろに分けられます。口の信心、頭の信心、腹の信心、と分けるのもその一の分け方です。」とし、「口の信心」とは口先だけ立派な事を言いながらも実際の心や行いがそれに伴っていない、いわゆる弁舌のみの信心を差し、それは「鸚鵡信心、鸚哥信心とか、蓄音機信心、ラヂオ信心とか極言せられても、所詮申し開きは出来ずまい」と皮肉を述べている。

¹⁸ 『金光教報』1952(昭和27)年9月1日号, 12頁。

¹⁹ 同上, 13頁。

²⁰ 『金光教徒』1957(昭和32)年6月11日付の投書欄。

「本教の放送について」

5月21日, 6月1日号に連載された市川彰師の朝日放送要旨を読み, 久しぶりに「之なるかな」との感がした。本教放送は, 最近どうも抽象的で, 毒にも薬にもならぬような事や, 型にはまった対人関係の話などで, 本気で聞く意欲が起きなかった。それが, 市川彰師のは具体的に, しかも非常に分かりやすく, 要を得ているのである。

こういうものが本教放送の在り方として, 新しく求められる一つの方向だと思う。

この記事以降, ラジオ放送に関する投書はなくなり, 一連の論争も紙面上においては一応終息という形となった。

²¹ この時点(1952年)においてはこの電波布教と取次の問題はこれから考えるべき課題として問題提起がなされたに止められているが, 後の放送協議員協議会(1974)においてはこの問題は「電波布教も結界取次を根源とした働きを展開であると考えて, それ自体の受け持ちをもって, 全体の中で働きしていくものである」と記されている(『金光教報』1974年8月号)。

²² 『毎日新聞』1953年5月26日。

²³ 谷口はクリスチャン・サイエンスに影響を与えたというニューソートの思想に深く影響を受けており, 「生長の家」立教後も, 海外のニューソートやクリスチャン・サイエンス活動家達との積極的な交流を行っていた。それゆえにアメリカでは「生長の家」はニューソートの一派として認識されている。

²⁴ CSMに関する基本文献については小田勝己『アメリカ新聞界の良識 クリスチャン・サイエンス・モニターの名記者たち(1994)』を参照。CSMは, 発信元がクリスチャン・サイエンスではあるが宗教色は殆ど皆無と言ってよく, 谷口が想定するところの「宗教的解説付きのニュースや宗教音楽, 宗教文学」等は扱っていない。小田は, いくつかの著作を読んだだけでは断定できないとしながらも, 「教会の体系の根本には「心の成長」がある(16頁)」とし, 「「病の癒し」は心の成長と不可分である。第三者が「なおしてやる」というような高飛車な態度ではなく, 個人の内面の成長と視野の広がりが自然にさまざまな改善をもたらす, と考えているようである(18頁)」と述べているが, 恐らく谷口がCSMから学び取るうとしたのは, 小田が挙げたような「(紙面を通しての)心の癒し」の側面なのではないだろうか。

²⁵ 外部者に対しては国際宗教放送に対する関心をより身近なものとしてもらい, 外部者に対してはこうして獲得した需要を, 直接国際宗教放送設立に対する要望の多さとしてアピールする目的があったのではないかと考えられるが, この推論に関しては憶測の域を出ないままである。

²⁶ 『毎日新聞』1954年6月17日。

²⁷ 他の主要な民間ラジオ放送局(ニッポン放送, TBSラジオ, 文化放送, ラジオ日本)の番組基準と比較してもラジオNIKKEIの番組基準における宗教項目の割合は目立って大きい(2005年11月現在)。先の新聞記事に挙げられたように, 開局当時の放送規定において宗教という文字が既に他の項目と併記されていたが, 現在においてもそれをそのまま踏襲していると言えるだろう。

²⁸ 『生長の家五十年史』237頁。「生活に必要なものは必ず神が誰かの手を通じて吾々のところへ持ってきて下さると云ふことが理論ではなく実際にわかつて来る(といふ)境地に達するにはどうすれば好いかと申しますと, 「生長の家」では「神想観」と云いまして, 神との一体感を深める修行を致します。」

²⁹ 同上, 237頁。

³⁰ 同上, 238頁。

³¹ 神想観の詳細については谷口の『生命の実相 第八巻 観行編(1957)』や『詳説 神想観(1970)』(共に日本教文社)を参照。「生長の家を通じて働き給う神よ, この合掌をアンテナとして大生命と一体にならせ給え(谷口1957, 20頁)」「合掌を天地の方向に一致せしめつつこの位置に持って来るのは, 眉間, 手指および手掌, 息という三つの霊脳の中樞を一カ所に集め……そしてここに, ラジオの真空管を沢山並べたように, 一種の霊的波動を受けるアンテナが構成されるということになるので

あります。……この靈気の波動に実相を観ずる念を加えますと靈気の波動が実相の波動と一つに合うということになり、そこに実相が実現する契機が作られるという事になるのであります(谷口 1970, 66-68 頁)」など、ラジオに例えて説明する部分は相変わらず多い。

³² 谷口, 1956, 45-58 頁。

³³ オング, 279 頁。

³⁴ 法, 106-107 頁。マクルーハンが「地球村」の中に見ていたのはこうした「電気の教会」である。マクルーハンは、声の文化の特性が活かされる限りにおいて電気メディアを肯定しており、それが身体から遊離した人間を生むだけであればもはや無意味なものであった。

³⁵ 水越は、アメリカのラジオ無線におけるエーテルをめぐる想像力が、やがて大きな失望や喪失感に変化した背景として、「ラジオ無線がマニアからテクノロジーに無関心・無知な大衆へと消費の担い手が変化した」こと、ラジオそのものよりも番組に楽しみを移行させていったことを指摘している(水越, 76-77 頁)。日本におけるラジオそのものへの初期の関心が次第に番組消費へと移行したのも、世間における「ラジオ気分」の喪失を確認することによって、ほぼ同様の軌跡を辿ったと言えるだろう。

※ 本稿は、2005 年度日韓次世代学術フォーラム第2回国際学術大会論文集『次世代人文社会研究』第2集に掲載された論文に、加筆修正を加えたものである。

The Radio Practice of “Konko-kyo” and “Seicho-no-ie” in the 1950s

Kaoru ENOMOTO

When radio broadcasting started in 1925, people often saw the radio as a “mix of science and religion” and described its character as “Radio-Kibun (a kind of numinous feeling)”, indicating that people had hoped the new media would connect human beings to a new world. This feeling gradually faded over the ages, but it survived as a metaphor hidden behind culture.

In 1950, when the Broadcasting Law was enacted and the ban was lifted on private radio-broadcasting, some religious groups started their own broadcastings out of a religious belief in the medium of the radio. In this paper, the different cases of Konko-kyo and Seicho-no-ie have been chosen for analysis; the former, because it had started broadcasting very early among new religions, and the latter, because it had a keen sense of using media.

The staff of Konko-kyo saw the radio as a new means of propaganda and public enlightenment, but they were torn between these two uses in practice. Considering the social need at that time, they preferred a more enlightening program rather than a propagandistic one, but their members thought it something missing and criticized them strictly it. The staff therefore had to seek a more effective way to balance the two, and put this dispute to rest by employing a narrative story about healing by unwavering faith .

In the case of Seicho-no-ie, Masaharu Taniguchi, the leader, had a keen interest in radio not only as the tool of propaganda but also as a symbol of connection between human and mystical metaphysical object. His metaphorical remark about the radio can be seen as a reflection of the line of thinking which had been cultivated in the religious backdrops of Oomoto, New Thought, and Spiritualism, as well as in the social background of “Radio Kibun”. Through these cases, we can see that they reflect their own religious colors.